生けるものは銀

三好徹

講談社文庫

講談社文庫

生(い)けるものは銀(ぎん)
三好(みよし) 徹(とおる)

昭和56年4月15日第1刷発行

発行者　野間惟道
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2-12-21
電話　東京 (03)945-1111(大代表)
振替　東京 8-3930
デザイン　亀倉雄策
製　版　豊国印刷株式会社
印　刷　豊国オフセット株式会社
製　本　有限会社中沢製本所

© Toru Miyoshi 1981

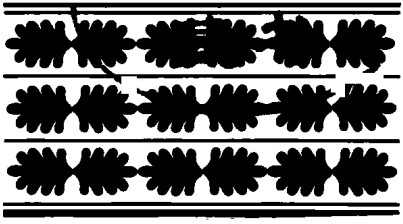
Printed in Japan

0193-361974-2253 (0)　定価440円
(落丁本・乱丁本はおとりかえします)

社文庫

生けるものは銀

三好　徹



目次

前兆　七
元憲兵　三〇
秘密　五一
消える　七四
影の部分　九五
ミスター・マオ　一一七
手がかり　一三八
孤独な道　一五九
鎖　一八〇
黒い渦　二〇一
没法子　二二三
香港　二四五
国境線　二六七
ギャンブル・シティ　二八八
死線　三一一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

銀と瓦礫　三三
解説　郷原宏　三六〇

生けるものは銀

前兆

1

滝口美紀の父親に会う前まで、神野(じんの)保彦はかなり自信をもっていた。考えぬいた言葉を用意していたし、相手の態度がどうあろうと、臨機応変にさばけるつもりだった。といって、かれが平静そのものだったというわけではなかった。恋びとの父親に会って結婚の許しを求めようとする男が、平静でいられるはずもない。ただ、誠意をこめて話せば、わかってくれるだろう、という安心感のようなものはあったのだ。

美紀の父親、滝口淳平は小さな会社を経営している。小さな会社、といっても、その内容はひどく良いという話である。社員は数人しかいないのだが、ある抗生物質の販売権を一手に握っていて、それを売りさばくだけでかなりの手数料がころがりこんでくる。

田園調布の邸宅街にある滝口家は、広い庭をもった数寄屋ふうの造りで、保彦の案内された応接間だけが洋風になっていた。

時刻はすでに夜八時ごろで、あたりは静まりかえっていた。静かすぎて、保彦には落ち着けなかった。ふかぶかとしたソファに浅く腰を下ろしている保彦は、一時間前に出てきた新聞社の喧騒にみちた空気をふとなつかしいものに感じた。吸いガラが山積みになった灰皿や食べ残しのど

んぶりが並んでいる、あの雑然とした場所が性に合っているように、保彦には思われた。
美紀と結婚できるようになっても、自分は決してこういうところには住まわないだろう、また安月給では住めもしないが、とかれは、壁にかかっている高名な画家の絵を眺めながら考えていた。
「お待たせした」
といって、和服姿の淳平が入ってきた。保彦は反射的に腰をうかし、神野保彦です、と挨拶した。
「きみが神野君か」
と滝口淳平が立ったままでいった。抑揚のない口調だった。
それが喰い違いのはじまりであった。先方が立ったままであり、腰を下ろすようにすすめもしないので、保彦の方も坐るわけにはいかなかった。いきおい、棒立ちの姿勢で話すようになり、まるで対決するような雰囲気がかもし出されてしまったのだ。
保彦の口から飛び出した言葉も、あらかじめ考えたものとは別ものになってしまった。
「ぼくはお嬢さんと結婚しようと思っています」
そういってから、保彦は、唐突すぎてまずかったな、と気づいた。しかし、かれの意思に反して、言葉の方がひとりでに淳平めがけて飛び出して行く。
「そういうわけで、今晩、お邪魔にきました」
淳平は帯に手をかけ、ほう、といいたげに口もとをすぼめた。それから、ひどくゆっくりとした動作で回りこみ、羽織のすそをさばいて腰を下ろした。

続いて保彦も坐ったが、用意しておいた名文句はとうに頭の中から失せていた。臨機応変どころか、ゆび先まで硬ばっている。気をしずめようとしてタバコを口にくわえたが、フィルターの方に火をつけかける始末だった。

淳平はにこりともしなかった。

「藪から棒、とはこのことだね」

「そうでしょうか」

淳平は、あきれたというふうに眼をしばたたいた。保彦はかまわずにいった。

「ぼくは、お嬢さんがお話ししてくださっていると思っていたものですから、そこで……」

「まア、待ちなさい」

保彦の意気込みをそらすように手をあげ、

「全然、聞いとらんというわけじゃない。新聞社にお勤めだということは、あれから聞いている。いや、ついさっき、聞いたばかりなんだが、新聞社の方は何部かな？　社会部か政治部か……」

「航空報道部です。略して、航報部といっていますが」

「航空報道部というと、飛行機の？」

「そうです。ぼくは航空大学の卒業で、社ではセスナの方をやっています」

「そうすると、パイロット？」

「はあ」

淳平の顔がわずかに動いた。

保彦はもどかしかった。美紀は、うちのパパは気難し屋だから、話す時機がむずかしいとは

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

いっていた。だが、これでは、なにも話していないにひとしい。それとも、淳平が、聞いていながら知らないふりをしているのだろうか。

「それで、パイロットになったのは、だれかにすすめられてかな？」

「すすめられたわけじゃありません。おふくろは反対していました。おやじがやはり飛行機のりだったものですから」

「なるほど。で、お父上は……」

「なくなりました。戦争中ですけれど」

「陸軍？　海軍？」

「いいえ、軍人じゃなかったんです。中華航空という会社のパイロットでした」

「中華航空の！」

「ご存知ですか」

淳平は、いったんつばを飲みこむようにのど仏を動かしてから、かすかにうなずいてみせた。

「そういう会社のあったことは、知っている。あのころは、内地を大日本航空が受けもち、中国大陸を中華航空がカバーしていた。たしか、そうだったと思うが……」

「ぼくは子供だったんで、くわしい話は知りませんが、おっしゃるとおりだったと聞いています」

身許調べをされているらしい、と保彦は感じた。ということは、最初の印象と違い、事態は好転しつつあるといえるのではあるまいか。とっつきにくい感じをあたえられたが、なかみは外見ほどではないのかもしれない……。

2

滝口淳平は、天井の片隅をじっと見据えるようにしていた。時間にすれば、ほんの一分足らずの間であったが、保彦には十分以上にも感じられた。それから淳平は口のなかでなにか呟いた。だが、保彦には聞きとれなかった。

淳平が口もとを引きしめた。保彦は背筋を硬ばらせて、相手の言葉を待った。

「それで、美紀といっしょになりたいそうだが、かりに結婚した場合、いまの勤めをどうするおつもりかな？」

「どうするつもりか、といいますと？」

「辞めて、わたしの会社に入ってくれるかどうか……」

「ぼくは新聞社を辞める気はありません。好きで選んだ道ですから」

「失礼だが、新聞社の月給は？」

「本俸はとても安いんです。でも、飛ぶと航空手当がもらえますから、ふたりで食べて行くのはじゅうぶんだと思います。もっとも、贅沢はできませんが……」

「美紀はわたしの一人娘だ。だから、あれと結婚する人に、わたしの仕事を引き継いでもらわねばならない」

「しかし……」

いいかける保彦の鼻先をぴしゃりと抑えるように、淳平がきっぱりした口調でいった。

「そればかりじゃない。パイロットは危険な職業だ。現に、お父上も亡くなられたそうではない

か。そういう仕事に、わたしは、婿となる人を従事させておくわけにはいかない」
「飛行機が危険だというのは、現代では通用しない迷信みたいなものです。航空機の事故率は、鉄道なんかよりも低いんですよ」
「そうだろうか。新聞社の飛行機が取材中に事故を起こしたという記事を、わたしは何度か読んだ記憶がある。いずれにしても、パイロットを辞めてもらわねば、安心できない」
「そうすると、辞めないかぎり、ぼくらの結婚は認めていただけないということでしょうか」
そうだというふうに、淳平はうなずいた。
保彦はなおもいった。
「理由は本当にそれだけですか」
「どういう意味かな？」
「かりに、新聞社を辞めるにしても、ぼくはおたくの会社には入りませんよ」
「なぜ？」
「ぼくがそうすれば、財産が目当てかと思われるのがいやなんです」
淳平の口もとがよじれた。それが笑いの表現なのか怒りのあらわれなのか、保彦には判断できなかった。淳平は一瞥していった。
「よほどパイロットが好きらしいね」
「好きです」
「危険な仕事だからかね」
「ぼくは少しも危険だとは思っていないのです」

「しかし、危険であることには変わりはない。若いから、死というものを軽く考えすぎているように、わたしには思えてならない」
「でも、道を歩いていても、空からなにか降ってきて死ぬことだってあります。かなり前のことですが、自殺を決意した人がビルの屋上から飛び降りました。すると、その下を歩いていた人の上に落ち、自殺しようとした人は助かって、歩行者が死んだという事件があります」
「じつに教訓的な話だね」
「おっしゃるとおり、ぼくは若いけれど、死というものを考えないわけではないんです」
「しかし、きみは死を少しも怖がっていないね」
「あるいは、そうかもしれません」
そう答えながら、保彦は、なにを話しにここへきたのだろう、と思わずにはいられなかった。これでは、まるで死についての人生論をかわしにきたようではないか。本当は、死という忌むべきものではなく、結婚という至上の喜びを得るためにきたはずなのに……。
保彦は少し興奮していった。
「ぼくはお嬢さんと結婚したいのです。いや、結婚するつもりです」
「きみは、一本気ないい青年だ」
淳平が軽くいなすようにいった。答えようがなくて、保彦は沈黙を守った。淳平はなおもいった。
「わたしは、きみが好きになったよ。どうだろう？　考えなおして、わたしの会社に入ってくれないかね」

「いまのぼくには、その気持はありません。それに、理窟をこねるようですが、結婚は両性の合意があればそれでいい、と憲法でも認められています」
「そのようだね」
「ぼくが今夜お邪魔したのは、できることならご家族の方にも祝福された結婚をしたかったからなんです」
「そうすると、きみは美紀をわたしの手からさらって行くというわけだね」
どう返事したらよいのかわからなかったが、淳平があくまでも反対するならば、結果として、そういうことになるだろう。保彦は唇をぎゅっと結んでうなずいた。
淳平は手を鳴らして、家政婦を呼んだ。
「お客さまがお帰りだ」
お嬢さんに会わしてください、といいたかったが、その言葉をのみこんで、保彦は外へ出た。門を離れてから、かれは振り向いた。美紀がいるはずの、灯のともった二階の部屋の窓を、祈るような気持で見上げたが、窓はついに開かれなかった。

3

東洋新聞航空報道部の本拠は、銀座の社屋におかれているが、保彦たちパイロットは、専用飛行場のある多摩川分室で待機している。なにか事件があれば、いつでも飛び立てる仕組みなのだ。そのかわり、事件のないときは、分室のなかで、部員たちは将棋をさしたり、カードをしたりしている。

この分室の主といわれているのが、ヘリコプター・パイロットの大場だった。戦前からのベテランで、八千時間以上の記録をもっている。

保彦は、大場と将棋をさして、三番棒に負けた。一局百円の約束である。日ごろは、たいていい大場から頂くのだが、この日の保彦はひどく調子が悪かった。

大場はにこにこしていった。

「もう一番くるか」

「いや、きょうは止めておきます」

大場は、三百円うけとると、駒をしまいこんだ。

保彦が洗面所へ行って戻ってくると、大場は、若い整備士の木崎を相手に、昔話をしていた。

「……そこでガソリンがつきたから、止むを得ず、暗夜の相模湾に着水したんだ。ところが、救命ブイが二個しかなかった。乗っていたのは、いまもいったように四人でね。このうち三人が金鎚なんだ。四人とも飛行機の上に這い上ったが、飛行機はみるみるうちに沈みはじめた……」

大場はそこで茶をすすった。木崎が焦れたように、

「で、どうしたんですか」

「見渡すかぎり真っ暗でな。SOSは発信しておいたが、救助船はとうてい間に合いそうにない。局次長に部長におれの三人の金鎚が二個の救命ブイを前にして、互いに顔を見合わせた……」

大場はタバコを吸った。深刻な表情であった。

「それで……」

「さすがのおれも観念した。ジャンケンやクジで決めるわけにもいかない。その間にも機はどん

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton